慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フィーニアン蜂起(1867年)とJ・デヴォイの回想録
Sub Title	Fenian rising of 1867 and J. Devoy's memoir
Author	高神, 信一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.3 (1993. 10) ,p.240(78)- 254(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19931001-0078
Abstract	
Notes	特集 : 社会史と文学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻3号（1993年10月）

フィーニアン蜂起（1867年）と J・デヴォイの回想録

高　神　信　一

目次

I　はじめに
II　J・デヴォイの回想録
III　1866年2月の会議
IV　イギリス軍内部におけるフィーニアン組織
V　ダブリンにおけるフィーニアン蜂起
VI　結びに代えて

I　は　じ　め　に

1867年3月5日の夜，イギリス統治下のアイルランドで蜂起が決行された。蜂起を決行したのは，イギリスからの独立を武力により獲得することを目的とした，フィーニアンと呼ばれる秘密組織であった。蜂起はアイルランド各地で決行されたが，ダブリンの蜂起が動員された人数からみて最大のものであった。しかし，ダブリンの蜂起は一日で終った。本稿は，このダブリンの蜂起という一つの事件をめぐって以下にみるような二つの異なる歴史解釈がなぜ生じたのか，を明らかにする試みである。

フィーニアン運動史の基本書であるR・カマフォード『ザ・フィーニアンズ・イン・コンテクスト（*The Fenians in Context*）』（1985年）は，ダブリンの蜂起をつぎのように記述している。

「ダブリンのフィーニアンたちが市外へ集合する計画が作成され，3月5日の夕方男たちが南へ移動するのが目撃された。計画された集合地点はタラ・ヒルであった。千名以上のフィーニアンたちがそこに直接向かった。やや小規模なグループは，南東からタラに接近しようとし，……このグループあるいはその一部は，タラに向かう前にステッパサイド，グレンカレンの警察バラックを占拠した。しかし，タラの反乱者たちは3月5日から6日の夜にかけてのきわめて早い時期に，計画通りに集合せずに解散してしまった。十数名の警官との交戦――一名のフィーニアンが死亡した――は混乱を引き起こした。[1]」（傍点引用者）

注（1）　R.V.Comerford, *The Fenians in Context* (Dublin, 1985), p.138.

このカマフォードの記述から，ダブリンのフィーニアンはタラ・ヒルに直接集結することを計画した少なくとも千名以上のグループと，ステッパサイド，グレンカレンの警察バラックの占拠後タラ・ヒルに集結しようとしたグループに分類されることがわかる。そして，いずれのグループもタラ・ヒルに集結することに失敗し，警官との交戦は蜂起に終りを告げたことが読みとれよう。

これにたいして，筆者がアイルランド国立公文書館所蔵の警察の報告書および裁判記録，そして新聞を使用することにより明らかにしたダブリンの蜂起はさまざまな点で異なる。筆者の研究によると，ダブリンの蜂起はより複雑な経過を示したのである[(2)]。蜂起計画によると，ダブリンのフィーニアンはタラ・ヒルに集合し，そこを軍事基地としてゲリラ戦を開始し，それによってダブリン市内を警護していたイギリス軍を誘い出す。そこでダブリン市内あるいはその近郊に集合したフィーニアンが，イギリス軍不在のダブリン市を攻撃するというものであった。

ダブリンのフィーニアンは，この蜂起計画にしたがって行動しようとした。かれらを蜂起のさいに取った行動から六グループに分類することができる。その六グループとは，武器が不十分であることを理由に蜂起に参加しなかったキングスタウンのグループ，ダンドラムなど三つの警察バラックを攻略したJ・キルウェン（J.Kirwen）のグループ，タラ・ヒルに集合した7,000名から8,000名で構成されたグループ，タラの警察バラックを攻撃した三つの異なった「部隊」からなるグループ，市内の主要な建物を攻撃することを予定していたグループ，ダブリン蜂起の司令官ハルピン（Halpin）将軍のグループである。

しかし，実際の蜂起は，カマフォードが指摘しているように，計画どおりには展開しなかった。だが，7,000名から8,000名のフィーニアンがタラ・ヒルに集合したのである。そして，かれらは指揮系統の混乱により自ら解散せざるをえず，蜂起は失敗したのである。

それではなぜダブリンの蜂起という一つの事件をめぐって二つの歴史解釈が生じたのであろうか。そこでダブリンの蜂起が今日までどのように記述されてきたのかをみることとする。歴史家でありナショナリストでもあるD・ライアン（D.Ryan）は，1967年に刊行された『ザ・フィーニアン・チーフ（*The Fenian Chief*）』のなかで，ダブリンの蜂起をつぎのように記述している。

「ハルピン将軍がダブリン州の作戦の総指揮者であった。ダブリン市内自体では戦闘はまったく行われず，治安当局はフィーニアンが市内からダブリンの丘陵地帯に行進していくことを阻止しなかった。タラでは真夜中に多数のフィーニアンが警察バラックを攻撃したが，［警官の］60丁のライフルの一斉射撃によって，12名が負傷しスティーブン・オドノフー（Stephen O'Donoghue）とトマス・ファレル（Thomas Farrell）の2名が殺され，かれらの士気はくじかれ退散していった。警察バラックを攻撃した人数は数千名であり，多くは武器をもたず，偵察隊，先行部隊もなく，いかなる警戒もせず行進していたのであった。……ハルピンとニー

注（2） ダブリンのフィーニアンの蜂起にかんしては，拙稿「ダブリンにおけるフィーニアンの蜂起（1867年）」（『三田学会雑誌』84巻4号1992年1月）を参照されたい。

ル・ブレスリン（Niall Breslin）は予定された集合地点から数マイル離れたところで60名の仲間と待機していたのであったが，後にデヴォイ（Devoy）に語ったところによると，タラへの行進は説明がつかない大失敗であり，指揮を取っていたオドノフーはフィーニアンの将校ではなかったということである。[3]」

カマフォードは，後述するL・オブロイン（L.Ó Broin）とR・キー（R.Kee）を参考にはしているが，基本的にはこのライアンの記述を踏襲していることは明らかである。それではライアンはどのような史料を使用し蜂起を記述したのであろうか。強調すべきは，ライアンの蜂起にかんする記述は，フィーニアン指導者J・デヴォイ（J.Devoy）の回想録にもとづいている，ということである。したがって，デヴォイの回想録を検討することに，ダブリンの蜂起をめぐる二つの解釈がなぜ生じたのか，を解く鍵がある。

II　J・デヴォイの回想録

回想録は19世紀イギリス文学の一つのジャンルとして確立された自叙伝に分類されるものであり，自叙伝の表題には，「思い出」，「回想」，「メモワール」，「冒険」，そして，「……の生涯」という言葉が使用されている。[4] 近年，歴史研究の方法としてオーラル・ヒストリーの有効性が提唱されているが，歴史史料としての自叙伝は，それほど時代を古く溯ることができないというオーラル・ヒストリーの限界を補うことができるという長所をもっている。[5] しかし，自叙伝を歴史史料として扱うばあいには，著者がどの程度まで事実を述べているのか，あるいは，作者の記憶に誤りがないのか，といった問題を検証しなければならない。作者が意図的に事実を述べなかったばあいには，その理由を明らかにし，そのことが自叙伝の読者に与えた影響を考慮する必要もあろう。

1860年代に活躍したフィーニアン指導者の多くは，1860年代後半の治安当局の弾圧の結果，逮捕されたりアイルランド国外へ逃亡したりしたが，それ以後ジャーナリストとして生計をたてる者も多かった。そのなかの何人かは回想録を執筆している。かれらが回想録を執筆した背景には，自分たちの政治上の過去を書き残しておきたいという欲求があったことに疑問の余地はない。さらに，かれらが回想録を執筆した時点では，アイルランドはイギリスから独立しておらず，フィーニアン運動の支援を喚起するという意図もあったという点は，重要である。

フィーニアン指導者の回想録を年代順に列挙してみると，以下のようになる。

注（3）D.Ryan, *The Fenian Chief* (Dublin, 1967), p.258.

（4）デイヴィッド・ヴィンセント『パンと知識と解放と』川北稔・松浦京子訳　岩波書店　1991年，p.4.ヴィンセントの研究は，19世紀イギリス労働者階級の自叙伝を史料とし，労働者階級の意識や生活を明らかにしている。

（5）イギリスのオーラル・ヒストリーにかんしては，P.Thompson, *The Voice of the Past* (Oxford, 1978) を，日本のそれにかんしては『歴史学研究』568号，1987年を参照。

J.Denvir, *The Irish in Britain from the Earliest Times to the Fall and Death of Parnell* (London, 1894).

J.O'Leary, *Recollections of Fenians and Fenianism* (London, 1896).

J.O'Donovan Rossa, *Rossa's Recollections, 1838 to 1898* (New York, 1898).

M.Davitt, *The Fall of Feudalism in Ireland* (London, 1904).

J.Denieffe, *A Personal Narrative of the Irish Revolutionary Brotherhood* (New York, 1906).

J.Denvir, *The Life Story of An Old Rebel* (Dublin, 1910).

J.Devoy, *Recollections of An Irish Rebel* (New York, 1929).

F.Roney, *Frank Roney, Irish Rebel and California Labour Leader*, ed. by I. Cross (Berkeley, 1931).

M.Ryan, *Fenian Memories* (Dublin, 1945).

この他，アイルランド国立図書館にはT・ルービー(T.Luby)[6]とJ・オブライエン(J.O'Brien)[7]の未刊行の回想録が所蔵されている。

J・デンヴァー (J.Denvir)，M・ダヴィット (M.Davitt)，F・ルーニー (F.Roney)，M・ライアン (M.Ryan)，J・オブライエンは，1860年代にダブリンには居住しておらず，ダブリンの蜂起にかんして一切言及していない。また，J・オリアリー (J.O'Leary)，J・オドノヴァン・ロッサ ((J. O'Donovan Rossa)，T・ルービーは，フィーニアン指導者として60年代の運動に積極的に関わり，運動の中心地ダブリンで活躍したのであるが，フィーニアン運動の機関紙『アイリシュ・ピープル (*Irish People*)』事務所の1865年9月の捜索にさいして逮捕されたので，蜂起を直接知る立場になかった。

それにたいしダブリンの蜂起に言及しているのは，J・デニーフ (J.Denieffe) とJ・デヴォイの回想録である。デニーフはフィーニアン運動の設立から蜂起直後まで運動の指導的立場にあり，自らも蜂起に参加したが，デヴォイの回想録に比較すると蜂起にかんする記述は少ない。一方，デヴォイは1866年2月に逮捕され蜂起には参加していないが，蜂起参加者からある程度の情報を収集してダブリンの蜂起に言及し，後のフィーニアン史研究者が1867年蜂起の記述するさいに多大な影響を与えてきた。

デヴォイのフィーニアンとしての活動を略述しよう[8]。デヴォイは1842年アイルランドのキルデア州に生まれ，10代でフィーニアン運動に参加した後，軍事訓練を受けるためにフランス外人部隊に一時参加し，アイルランド帰国後はキルデア州のフィーニアン組織の指導者として活躍した。そし

注 (6) MS 331.

(7) MS 16695-6.

(8) D.Ryan, *The Phoenix Flame : A Study of Fenianism and John Devoy* (London, 1937) ; W. O'Brien and P.S.O'Hegarty (eds.), *Devoy's Post Bag*, vol. I and II (Dublin, 1948, 1953) ; H. Boylan, *A Dictionary of Irish Biography* (Dublin, 1978) を参照。

て1865年にはイギリス軍内部におけるフィーニアン組織の指導者となり，66年2月に逮捕されるまでダブリンで数百名のイギリス軍兵士をフィーニアンとして組織することに成功している。

1871年，デヴォイは釈放されアメリカに渡り，その地でフィーニアンとしての活動を続けた。かれはジャーナリストになり，そして「クラン・ナ・ゲール（Clan na Gael）」と呼ばれる，アイルランド系アメリカ人がアイルランド独立支援を目的として設立した組織に参加し，その指導者としてアイルランド独立運動に生涯関与した。「クラン・ナ・ゲール」は，フィーニアン運動を経済的に援助し，アイルランドの独立闘争への貢献は図り知れないものがあった。また1903年，かれは『ゲーリック・アメリカン（*Gaelic American*）』という新聞を自ら創刊し，1928年にこの世を去るまでその編集に従事した。

デヴォイの回想録は『ゲーリック・アメリカン』紙上で発表されたものを中心にして編集されたものである。回想録は七つの章からなり，第1章から第4章までは1850年代末から70年代初頭までのフィーニアン運動の生成・発展過程を描写し，とくに第4章は67年蜂起を扱っている。第5章ではフィーニアン囚人の救出作戦などの劇的なエピソードを記述し，第6章は11名のフィーニアン指導者の伝記的叙述にあてられている。最終章は，「クラン・ナ・ゲール」が1916年のイースター蜂起[(9)]をいかに支援したか，を明らかにしているのである。

生涯をアイルランド独立のために捧げたデヴォイは，アイルランドのナショナリストたちにとって英雄であり，その人格は賞賛された。このことは，アイルランド史研究者P・オハガティー（P. O'Hegarty）の以下の記述にみることができる。

「かれ［デヴォイ」は生涯独身を通し，あらゆる個人的考えのみならず感情をも排除した，唯一絶対的な熱烈な献身をもって，かれの全人生はアイルランドの運動に捧げられた。かれはアイルランドのために生き，あらゆるもの，あらゆる人をアイルランドの運動にとってどのような価値をもつかによって判断した。素晴らしい頭脳と強烈な個性をもち，事実を現実的に認識することによって，修正されることはないが柔軟になりうる武力闘争による分離主義［イギリスからの］を信じる男は，アメリカで半世紀以上にわたって素晴らしい仕事をした。[(10)]」

このようなデヴォイをアイルランド独立運動の英雄とする捉え方が，デヴォイの回想録を批判的にみる立場を許さなかったことは想像に難くない。

デヴォイの回想録のはしがきを書いている，フィーニアン運動研究者S・オルーング（S.Ó Lúing）は，回想録を公平に記録した信頼のおけるものとしてつぎのように述べている。

「回想録は事実を語っている名著である。高潔な冒険の基礎的な資料がここにある。だが，デヴォイの散文の核心には，誇示や装飾といったものはまったくない。大部分の詳細な記述は，

注（9） イースター蜂起にかんしては，堀越智『アイルランド　イースター蜂起　1916』論創社　1985・年を参照。

（10） W.O'Brien and P.S.O'Hegarty (eds.), *op.cit.*, vol. I , p.xxxi.

かれの個人的知識に基づくものであるが，そのなかには，実際の事件を直接知り得る立場にあったリチャード・オサリヴァン・バーク（Richard O'Sullivan Burke）やヘンリー・フィルゲート（Henry Filgate）といった仲間のフィーニアンから得た知識もある。デヴォイは勝利と失敗を公平に記録している。かれは批判を省くことがない。かれは数世紀にわたって優力である歴史的感覚を所有している。[11]」

果たしてそうであろうか。以下，ダブリンのフィーニアン蜂起を例にとり，デヴォイの記述を検討してみることとする。

III　1866年2月の会議

デヴォイは，ジャーナリストとして蜂起にかんする正確な事実を記述しようとした一方，1867年3月という時期に蜂起を決行したフィーニアン指導者を批判する意図をもって蜂起の記述をすすめている点にまず留意しなければならない。1860年代に「ヴィクトリア期の繁栄・平和」を享受していたイギリスから，武装化が不十分であったフィーニアンが独立を獲得することは，軍事的にみて殆ど不可能であった。しかしながら，1865年終りから66年はじめ（デヴォイがフィーニアン運動の絶頂期と考えた時期）に蜂起が決行されなかったことに，デヴォイはフィーニアンの蜂起失敗の最大の原因を求め，つぎのように述べている。

「1867年蜂起は軍事的観点からすると，見るに耐えない失敗であった。あの状況では失敗以外ありえなかった。1865年終りおよび66年はじめの好ましい状態は，すでになかった。そしてスティーブンス［フィーニアン運動の最高指導者］の体制を特徴づけた弱さと不完全さを改善するのに十分な時間はなかった。[12]」

こうして，デヴォイの蜂起にかんする記述は蜂起の指導体制を批判する論調で書かれていくことになる。

デヴォイが1867年という時点で蜂起を決行した指導者を批判することには理由があった。1866年2月21日に開かれた，蜂起決行にかんするフィーニアン指導者会議でデヴォイが即座の蜂起決行を主張したにもかかわらず，スティーブンスらの指導者がデヴォイの意見を採用しなかったことにたいする反発がその理由である。さらに，デヴォイは自分の過去の行為を誇張するために，自らが組織者であったイギリス軍内部におけるフィーニアン組織の優秀さを示し，この組織を活用すれば蜂起は成功したとする記述をおこなっている。

ここで前述した蜂起決行にかんして開かれた会議についてやや詳しくみてみよう。治安当局は1866年2月17日に人身保護法の適用を停止し（*29 Vict.*, c.4），同日，ダブリンの多数のフィーニア

注（11）Devoy, *op.cit.*, p.vii.
（12）*Ibid.*, p.185.

を逮捕した。この治安当局による弾圧は，フィーニアン指導者に危機感を抱かせ，議論の焦点は逮捕者が増加して運動が壊滅状態に陥るまえに蜂起を決行すべきかどうか，に合わされた。

デヴォイは，その当時の雰囲気をつぎのように回想している。

「われわれにとって，明らかなことは有能なすべての仲間が危険な状態にあるということである。即座に蜂起を決行するか，指名手配中の者たちに安全な場所に脱出する機会を与えるようにはっきりと蜂起の延期を決定するか，を明確にさせることである。さもなければ，組織は数週間のうちに壊滅状態に陥り，蜂起を決行することはそれ以後不可能となるであろう。[13]」

会議の席上，アメリカ人将校T・ケリー（T.Kelly）大佐[14]はダブリンの組織の状態を中心にしながら，フィーニアンの組織全体の状況を説明した。[15] ケリー大佐によると，ここ数日間の大量逮捕にもかかわらず，ダブリンの組織は無傷のまま存在しており，命令は数時間以内にダブリンの組織のメンバー全員に伝達することができ，またレンスター地方の組織にはさらに数時間，アイルランドの全組織は2日以内に命令が伝達できる，ということであった。

イギリス軍内部のフィーニアン組織の指導者であったデヴォイは，軍内部の組織を活用することによって，ダブリンが占領可能であると主張した。かれによると，ダブリンに駐留するイギリス軍兵士の総数は6,000名であり，その約半数がアイルランド人，そして「フィーニアン兵士」（フィーニアン組織のメンバーであるイギリス軍兵士）の総数を1,600名と計算していた。したがって，1,600名の「フィーニアン兵士」が，残りの4,400名のうちからアイルランド人兵士を味方につけることにより，ダブリンを占領することが可能であると主張したのである。[16] これにたいして，ケリー大佐は武器の不足と軍事指導者の不足を理由にデヴォイの提案を退け，かくして蜂起の延期が最終決定された。会議終了後まもなくしてデヴォイは逮捕される。

デヴォイは，アメリカ人将校ケリー大佐による蜂起延期の決定に承伏できず，「われわれにとって，『今決行するか，あるいは永遠にあきらめるか』の問題であった。われわれは，長年にわたってアメリカに住み，ごく最近帰国したアメリカ人将校よりもアイルランド人のことをよく理解しているのだ。[17]」と述べて，大佐を批判した。さらに，デヴォイが1867年蜂起をフィーニアン指導体制批判へと結びつけた背後には，1866年に蜂起延期を決定したケリー大佐が1867年蜂起の最高指導者であったという事実を見逃すことはできない。

注（13） *Ibid*., p.107.

（14） 南北戦争終了後，除隊した100名以上のアイルランド系アメリカ人が，フィーニアンの蜂起の指揮をとるためにアイルランドに派遣された。（S.Takagami, "The Dublin Fenians, 1858-79", Ph.D.thesis, Dublin University, 1990, Chapter 5.）

（15） Devoy, *op.cit*., p.107.

（16） *Ibid*., p.108.

（17） *Ibid*.

IV　イギリス軍内部のフィーニアン組織

前述したごとく，デヴォイは，イギリス軍内部におけるフィーニアン組織を活用することにより蜂起を決行することを主張したが，ここでイギリス軍内部のフィーニアン組織がどのようなものであったのか，を簡単にみてみよう。

フィーニアンがイギリス軍兵士をメンバーにした目的は三つあったと考えられる。[18] 第一は，蜂起のさいにフィーニアン兵士は兵舎内の「非フィーニアン兵士」を攻撃し，兵舎を攻略することであった。第二は，フィーニアン兵士が兵舎に備えられている武器を「市民フィーニアン（civilian Fenian)」に提供することであった。第三は，フィーニアン兵士はその多数が兵卒であったのであるが，かれらよりも卓越した軍事知識と経験をもつアメリカ人将校と市民フィーニアンの間を媒介する「将校」として蜂起のさいに活躍することであった。

イギリス軍内部におけるフィーニアン兵士の最初の組織者P・オリアリー（P.O'Leary）が，組織化を開始したのは1863年終りから64年のはじめと推定できる。オリアリーの任務はイギリス軍兵士を組織のメンバーにするというよりも，かれらの間にフィーニアン運動を宣伝することに主眼が置かれ，いかにイギリスが若い健康な青年兵士を乞食にさせ，あるいは救貧院で死に至らしめるのか，そして軍隊が無情に小作人を追い立てるのか，といった話をして，イギリス軍兵士の感情に訴えた。[19]

1864年11月に逮捕されたオリアリーの後継者には，W・ローントリー（W.Roantree）がなった。ローントリーはフィーニアン兵士を積極的に組織化し，各連隊にリーダーを任命することにより，オリアリーの「緩やかな（loose)」組織を改善したのであった。[20] しかし，ローントリーは1865年9月に逮捕され，デヴォイがフィーニアン兵士の組織者として活躍することとなった。デヴォイは1866年2月に逮捕されるまでフィーニアン兵士の組織者の地位にあり，フィーニアン兵士の人数を増加させることよりもローントリーの組織を充実させることに全力を注いだ。デヴォイは連隊内の各中隊にリーダーを選び，中隊をさらに分隊に分割し分隊にもリーダーを置いた。[21]

先にみたように，デヴォイはこのフィーニアン兵士の組織を活用することにより蜂起が成功するかのように記述しているが，この組織はどの程度まで信頼できるものであったのだろうか。その手がかりとしてフィーニアン兵士の人数を検討してみよう。だが，フィーニアン兵士の正確な人数を知ることは，三つの理由からかなり難しい。第一に，フィーニアン兵士は組織から資金と酒を供給されたのであるが，かれらのなかにはそのためにフィーニアンであることを装っていた者がいたか

注（18）S.Takagami, *op.cit.*, Chapter 6.
（19）Devoy, *op.cit.*, pp.140-1.
（20）*Ibid.*, p.143.
（21）*Ibid.*, p.63.

らである。このような「見せかけの」フィーニアンと運動の主張に共鳴しアイルランド独立獲得のために行動する「純粋な」フィーニアンを区別することはほとんど不可能である。第二に，フィーニアン指導者は，自らの働きを強調し，さらに組織の士気を高めるためにフィーニアン兵士数を誇張した可能性がある。第三に，組織の秘密保持のためにその当時フィーニアン兵士数を記録した文書は存在していない。さらに，1866年の軍当局の弾圧政策により，イギリス軍内部の組織は壊滅状態に陥ったので，その実態はいっそう判りにくい。

しかし，デヴォイは，アイルランド全土のフィーニアン兵士数は8,000名であり，1,600名がダブリンに駐留したとしている。そしてダブリンに駐留したイギリス軍連隊のフィーニアン兵士数を具体的に，第5騎兵の300名，第10フザールの80名，第61の600名，第60ライフルの300名，第8の200名と記述している[22]。軍当局の文書のなかにある，1865年12月付のメモによると，その当時フィーニアン指導者は，5,500名のイギリス軍兵士が組織に属していたと把握していた[23]。この5,500名という人数は，デヴォイの8,000名を下回っている。これは，デヴォイが回想録では人数を誇張していることによるのかもしれない。

さらに，その当時のデヴォイの発言が回想録のなかの記述と矛盾している例がいくつかある。たとえば，1866年1月，デヴォイは第5騎兵連隊のフィーニアン兵士数を100名であると仲間のフィーニアンに語っているが，回想録ではその人数を300名としている[24]。したがって，ダブリンのフィーニアン兵士数は1,600名以下であることは確実である。

デヴォイは，ダブリンに駐留する1,600名のフィーニアン兵士を利用することによりダブリンは占領可能であると述べているが，実際はデヴォイが断言するほど蜂起成功の可能性は高くはなかったのではないだろうか。軍当局は1866年以降フィーニアン兵士の組織の弾圧を開始したので，1867年3月の蜂起決行までに組織は壊滅状態にあった[25]。

V　ダブリンにおけるフィーニアン蜂起

1867年3月5日の蜂起の夜，デヴォイはダブリンにあるマウントジョイ刑務所に収監されており，蜂起に直接参加することはできなかった。かれが実際知り得たのは，蜂起の夜の天候だけである。蜂起の夜をデヴォイは，雨，みぞれ，雪が絶えず降り続く非常な悪天候であったと回想している[26]。しかしながら，実際のダブリン市の天候は，デヴォイが描写しているほどドラマティックなもので

注（22）　*Ibid*., pp.108-10, 130, 150.
（23）　British Library, Sir Hugh Rose Papers. MS 42821.
（24）　*Freeman's Journal*, 18 August 1866.
（25）　軍当局はフィーニアン兵士のリーダーを軍法会議にかけたり，フィーニアン連隊を分割しダブリンから移動させた。
（26）　Devoy, *op.cit*., p.193.

はなかった。[27] ダブリン市郊外の丘陵地帯にあるタラ・ヒルでは，多数のフィーニアンが集合し，ゲリラ戦を展開するはずであったが，タラ・ヒルに雪が積もっていたという劇的な状況ではなかった。[28] したがって，天候によるフィーニアンの動員に支障をきたすほどではなかったのである。

デヴォイの回想録にある蜂起の夜の記述は，正確ではない。このことは，かれの回想録が半世紀近くたってから書かれたことによる不正確さからのみ説明されるものではない。もしデヴォイの記述が正確であったと仮定するならば，悪天候にもかかわらず，蜂起に参加したフィーニアンの一般メンバーの勇敢さを賞賛することになり，蜂起失敗の原因は，勇敢な一般メンバーを利用することができなかった指導者にあったことを主張できるのである。この天候の記述から蜂起を計画した指導部の批判を読み取ることが可能である。

1867年のフィーニアン蜂起を記述しているデヴォイの回想録の第4章は，「失敗する運命にあった蜂起」，「ステッパサイドとグレンカレン」，「フィルゲートの個人的話」，「タラの大惨事」，「コークにおける戦闘」，「ノッカデューンとキルクルーニイの森」，「ティペラリーの努力の失敗」，「キルマロックの攻囲」，「クレアにより果たされた役割」，「他の地域の大失敗」の10節からなる。これらの節のうちダブリンの蜂起を扱っているのは，「ステッパサイドとグレンカレン」，「フィルゲートの個人的話」，「タラの大惨事」である。

デヴォイがダブリンの蜂起をどのように記述したのか，を具体的にみてみよう。蜂起の翌日デヴォイは，フィーニアン運動に共感をもっていた刑務所の教誨師からフィーニアンの蜂起が決行されたことを聞かされたが，二日後にはダブリンの蜂起失敗の事実を同じ教誨師から知らされた。しかし，この教誨師が他の教誨師に交替したことにより，デヴォイは蜂起にかんする情報源を失ったのであった。[29]

デヴォイがダブリンの蜂起の詳細を知るようになったのは，後述するイギリスの刑務所でのハルピン将軍からの情報を除くと1871年に釈放されアメリカに渡ってからであった。ダンドラム，ステッパサイド，グレンカレンの警察バラックを攻撃したグループのリーダーであったキルウェンと彼の副官P・レノン（P.Lennon）から，デヴォイは蜂起についての情報を得たのであった。回想録のなかで，デヴォイがキルウェンのグループとタラの警察バラックを攻撃したグループを中心としてダブリンの蜂起を記述しているのは，そのためである。

「ステッパサイドとグレンカレン」の節では，1867年3月7日付の『フリーマンズ・ジャーナル（*Freeman's Journal*）』の記事をそのまま転載し，キルウェンとレノンの話で事実を補う形でかれらのグループの行動が語られている。『フリーマンズ・ジャーナル』は，キルウェンのグループがダンドラム，ステッパサイド，グレンカレンの警察バラックを攻撃した事実を簡単に報道している。キ

注（27） アイルランド共和国，旅行・運輸省の気象サーヴィスからの情報による。
（28） Magistrate Carte to Chief Secretary, 8 Mar. 1867 (C.S.O., R.P.1867/3829).
（29） Devoy. *op.cit.*, p.194.

ルウェンとレノンの話は警察バラックの攻撃の様子を非常に短く説明しているにすぎない。このグループがダブリンの蜂起においていかなる役割を果たす予定であったのか，は正確に把握されていない。

デヴォイは，「フィルゲートの個人的話」の節でキルウェンのグループの行動をより詳しく説明しようとしている。この節は1905年にデヴォイが編集している『ゲーリック・アメリカン』に掲載されたH・フィルゲートの手紙を直接引用したものである。フィルゲートは，キルウェンのグループのメンバーであり警察バラックの攻撃に参加したのであった。

フィルゲートがダブリンの蜂起を記述するに至った経緯は，キルウェンのグループのメンバーの死亡記事をE・フィーラン（E.Whelan）が書いたことにはじまる。フィーラン自身もキルウェンのグループのメンバーとして警察バラックの攻撃に参加しているのである。フィルゲートはこのフィーランの蜂起における記述の誤りを訂正する目的で『ゲーリック・アメリカン』に手紙を書いたのであった。フィルゲートはつぎのように述べている。

「『アイリッシュ・ピープル』の捜索から1867年3月5日の蜂起までに起こった出来事の，フィーラン氏の年代順の記述は，その当時の運動に積極的に参加していた者が知っているように，極めて正確なものである。しかし，蜂起の作戦行動にかんするフィーラン氏の記述は，非常に短いものであり，……その記憶すべき夜の部隊［キルウェンのグループ］の軍事的観点からみた状況は不明確なままである。[30]」

フィルゲートは，キルウェンのグループがパーマストンの私有地に集合後，ダンドラム，ステッパサイド，グレンカレンの警察バラックを攻撃した様子をフィーニアンの側から描写し，攻撃された警察の側から得られない貴重な情報を提供してくれる。しかし，フィルゲートの記述はダブリンの蜂起の複雑な全体像を明らかにはしていない。このことは以下にみるように，デヴォイの蜂起にかんする記述に誤りを生じさせることになった。

つぎにデヴォイの回想録の「タラの大惨事」の節をみてみよう。この節は後述するように，「史実」に反するいくつかの誤りが記述されている。デヴォイ自身，「1867年3月5日の夜，ダブリン州のタラの大惨事をひき起こしたことにかんする証言には多くの混乱と矛盾がある[31]」と認めているのである。

デヴォイは「タラの大惨事」を，ダブリン蜂起の司令官ハルピン将軍とブレスリンからの話に基づいて記述している。デヴォイはイギリスの刑務所でハルピン将軍と二年間一緒であったが，そのさいハルピン将軍からダブリンの蜂起にかんする話を聞いたのであった。ハルピン将軍は，蜂起の夜ホワイト大佐の私有地でブレスリンのグループとともにその場に集合する予定であったフィーニアンを待っていたが誰も現れなかったこと，そして自分がどのようにダブリン市内に戻ったかをデ

注（30） *Ibid*., p.199.
（31） *Ibid*., p.203.

ヴォイに語った。アメリカに渡ったデヴォイはブレスリンからも蜂起にかんする情報を知る機会を得たが，ブレスリンの話はハルピン将軍のものと一致していた。[32]

デヴォイがハルピン将軍とブレスリンから得た情報は不十分なものであり，デヴォイは蜂起にかんして誤った記述をした。デヴォイは回想録のなかでつぎのように述べている。

「[ホワイト大佐の私有地に] 他のサークルのメンバーは現れなかった。どのようにしてかれらが一般人であるスティーブン・オドノフー（Stephen O'Donoghue）の指揮下でタラに行進するようになったのかを，ハルピンやブレスリンは説明しなかったし，おそらく知らなかったであろう。われわれが確かなことは，『誰かが失敗をした』ということだった。……数千名からなるが，十分に武装されていないフィーニアンの中核のグループが，タラへの道を行進していた。真っ暗の夜に先行部隊もなく，なんらの事前の対策もとらず，村の近くで60丁の警察のライフルがかれらに向けて一斉に発射されたとき，オドノフーは殺され，数名が負傷し，……かれらは急いで逃亡しはじめ，混乱状態のなかでダブリンにできるだけ速く戻ろうとした。[33]」

警察側の史料とオドノフーのグループの一員であったフィーニアンの記述をもとにして検討してみると，デヴォイの記述には三つの誤りがある。第一に，オドノフーの指揮下にあったフィーニアンの人数は「数千名」ではなく，150名からなるグループにすぎなかった。第二に，タラの警察バラックに駐在していた警官はわずか15名にすぎず，「60丁のライフル」を発射することは不可能であった。第三に，デヴォイは多数のフィーニアンがタラ・ヒルにすでに到達していたことを述べずに記述を終えている。デヴォイが意図的に記述しなかったのか，あるいはこの事実を知らなかったのか，については不明である。

デヴォイによると，ダブリンの蜂起の失敗は，ホワイト大佐の私有地に集合する予定であった数千名のフィーニアンがその場に現れず，タラの警察バラックを攻撃し敗退したことにより説明されている。しかし，ダブリンの蜂起の失敗の原因は，タラ・ヒルに集結した7,000名から8,000名のフィーニアンが行動をおこさなかったことにある。デヴォイが記述するように，ホワイト大佐の私有地に集合するはずであったグループが現れなかったことは事実であるが，このグループがタラの警察バラックを攻撃したということは実証されえない。このグループが作戦通りに集合しなかったことによって，タラ・ヒルに集合したフィーニアンとハルピン将軍の間の命令系統が断絶したことに，蜂起の失敗の原因があったのだ。つまり，ダブリンの蜂起の失敗は，蜂起指導者の不十分な作戦指導および詳細な軍事計画の欠如にあった。しかし，デヴォイが記述しているほどダブリンの蜂起の全体像は単純なものではなかったのである。

注（32） *Ibid*.
（33） *Ibid*., pp.203-4.

VI　結びに代えて

デヴォイの蜂起にかんする記述は限られた情報をもとに構築した回想であるため，「史実」を反映せずに誤った情報を提供した。ダブリンの蜂起にかんしては，数千名のフィーニアンがタラの警察バラックを攻撃し敗退したという記述が歴史研究者の間で容認されてきた。デヴォイの回想録における蜂起の記述は，出版後半世紀以上経ても影響を与え続けているのである。

1970年初め，警察史料を利用したL・オブロイン『フィーニアンの熱狂（*Fenian Fever*）』（1971年）とR・キー『緑の旗――アイルランド・ナショナリズムの歴史（*The Green Flag : A History of Irish Nationalism*）』（1972年）が刊行され，フィーニアン史研究者はもはや蜂起にかんするデヴォイの記述を絶対的なものとすることはしなくなったようにみえる。オブロインの研究は，アイルランド国立公文書館の警察史料に依拠してダブリンの蜂起を描写している。しかし，ダブリンの蜂起の失敗はタラの警察バラックの攻撃の失敗にあった，というデヴォイの記述を修正してはいない。オブロインはタラの警察バラックの攻撃の様子をつぎのように記述している。

「多数のフィーニアンがクロンダーキンからやって来たので，バーク［警部補］は撤退しないばあいには発砲することを勧告した。かれらは勧告に応ずることなく，銃をうちながら原野を横切って右側に引き下がったが，隊列を整えてやって来た。バークは再びかれらに撤退するように要求したとき，かれらは40歩ほどの距離から20発の弾丸を発射したが警官には当たらなかった。12名の警官たちは，かれらに向かって射撃を開始し２名を負傷させ１名は重傷であった。[34]」（傍点引用者）

オブロインはデヴォイの記述のようにタラの警察バラックを攻撃したフィーニアンの人数を数千名とはしていないものの，タラ・ヒルにて7,000名から8,000名のフィーニアンが集合したことには言及せずに，ダブリンの蜂起の記述を終えている。

フィーニアンの裁判記録を一次史料としたキーの研究は，タラの警察バラックの攻撃の失敗がダブリンの蜂起を失敗に導いたとして，つぎのように記述している。

「数百名の反乱者がタラの小さな町に向かって行進していたとき，……バーク警部補が指揮する14名の警官隊に対峙することとなった。……反乱者のリーダーが『さあ今だ，同志，撃て，撃て』と命令した。バーク警部補によると，約50発の弾丸が警官に発射されたが，警官には１発も当たらなかった。警官は反撃に出た。反乱者は即座に逃げだし，後には１名の負傷者が残された。この敗退は壊滅的な結果をもたらしたようにみえる。というのは，このことがタラの周辺に集合するという企てを事実上中止させたからである。[35]」

注（34）L.Ó Broin, *Fenian Fever* (New York, 1971), p.151.

（35）R.Kee, *Green Flag* Volume Two : *The Bold Fenian Men* (1972, reprinted 1979), p.40.

このキーの記述はタラの警察バラックを攻撃した人数を数百人とし，デヴォイの数千名という人数を修正したが，タラの警察バラックにおける敗退がやはりダブリンの蜂起失敗の原因であった。

ダブリンの蜂起にかんする筆者の解釈とオブロイン・キーの解釈の相違は，タラ・ヒルに7,000名から8,000名のフィーニアンが集合したのか，という問題をめぐって生じたのである。ダブリン市の郊外に集合しゲリラ戦を展開するという蜂起計画によると，フィーニアンの第一の目的はタラ・ヒルに集合することであった。筆者の解釈ではフィーニアンはこのことに成功したのである。一方，オブロイン・キーの解釈ではフィーニアンは失敗した。当時の新聞，警察史料を検討してみると，筆者の解釈を支持する証拠を見つけ出すことができる。つまり，オブロイン・キーは，デヴォイの蜂起にかんする記述に重きを置きすぎたといえよう。換言すればフィーニアンは武装化されておらず，十分な蜂起計画もなかったという，「タラの大惨事」でデヴォイが記述したようなフィーニアンのイメージから，オブロインとキーは脱することができなかったのである。そのために，かれらの研究を利用した，前述のカマフォードの蜂起にかんする記述は，デヴォイのものとそれほど違わないのである。

以上ダブリンの蜂起をめぐって二つの解釈をみてきたが，デヴォイの回想録の扱い方が二つの解釈が生じた原因であった。1867年3月にという時期に蜂起を決行した指導者を批判する論調で，デヴォイはダブリンの蜂起を記述した。そして66年2月に蜂起が決行されたならば，デヴォイが組織者であったイギリス軍内部のフィーニアン組織を利用することで，蜂起が成功したかのような錯覚を与えるような記述をかれはしているのである。

回想録は歴史作品と文学作品の境界に位置するものであろう。回想録の執筆者は歴史家のように，実際に起こった事件を正確に記述することは必ずしも要求されてはいない。その一方，小説家のように架空の事件を記述してはならないというルールに従わねばならないだろう。回想録の執筆者が多少とも，自分に有利になるように事件を記述することは避けられない。そのため，そのなかには歴史的証拠が含まれている一方，執筆者に不都合な部分は削除されたり，事実が歪められたりしている。歴史家は，何が「史実」であるのかを他の史料を参考にしながら確定していくことが必要である。だが，歴史家は回想録の使用に消極的になる必要はない。フィーニアン運動史研究においても回想録には治安当局が知り得なかった貴重な情報が含まれているのだ。じじつ，ダブリン蜂起の司令官ハルピン将軍の蜂起の夜に置かれた状況をわれわれに教えてくれるのは，デヴォイの回想録だった。

最後に，この蜂起にたいする解釈の相違がフィーニアン運動自体の理解における相違を導き出したことをみてみよう。蜂起が無計画な烏合の衆の集まりとみなすことになったカマフォードは，フィーニアン運動とはアイルランド人の若者が仲間との娯楽をもとめて参加した運動であった，という結論を導き出している[36]。そして蜂起は，フィーニアン運動が「軍事的秘密結社というよりも社交

注（36） Comerford, *op.cit.*

のための運動」であるという確信を当時の人々にもたせたとしている[37]。しかし，ダブリンの蜂起の複雑な経過が明らかになると，カマフォードのフィーニアン運動理解はもはや成り立ち得なくなるのである。蜂起計画にしたがって，少なくとも7,000名から8,000名のフィーニアンが動員されたという事実から判断して，蜂起指導者の作戦指導が的確におこなわれれば，ダブリンの蜂起は長期戦となった可能性がある。たとえイギリスからの独立を獲得することができなかったとしても，蜂起は治安当局にとって重大な脅威となったかもしれないのである。

（経済学研究科後期博士課程）

注（37） R.V.Comerford, "Gladstone's first Irish enterprise, 1864-70", in W.E.Vaughan (ed.), *A New History of Ireland V Ireland under the Union 1.1801-70* (Oxford, 1989), p.439.